

小学校体育の授業改善の取り組みの現状と その方法の実態に関する報告 ～よりよい体育授業を目指して～

鈴木 直樹*

キーワード：授業改善、質的研究、リフレクション

I 緒言

近年、アメリカの授業研究法に影響を受けつつ、日本でも、形成的授業評価や授業場面観察、教師の相互作用行動の観察をもとにして客観的な量的データをもとにした授業改善(長谷川ら、1995; 高橋ら、1994)が行われるようになってきた。一方で、授業における状況と文脈との関連から子どもの学習を捉える必要性を強調し、質的側面からのアプローチによる授業研究の試みもエスノグラフィー(鈴木、2006)やグラウンデッドセオリーアプローチ(SUZUKI、2005)などを分析手法として活用して行われている。また、量的研究と質的研究を融合させて授業研究を進めていくことの重要性が叫ばれるようになってきている(高橋、2003)。さらに、Ryan(2005)は、教員養成段階にあって学生が身につけなければならない能力として「reflection」を強調し、反省的に授業を改善していくことの重要性を述べ、Rink(2006)やGraham(2001、pp.193-203)もまた、「reflection」を重要視し、質的視点と量的視点を合わせ持たせつつ、授業改善していくことで、教師としての力量が高まっていくことを示唆している。

すなわち、よりよい体育授業を目指して授業

を改善していくことは、教師の指導力の一つといえる。ところで、このような授業改善を目指した授業研究は、実際の学校現場でどれくらい行われているのだろうか、また、教師の授業改善に対する意識はどれくらい高いのだろうか。そして、授業実践者である教員が具体的に取り組んでいるのかどうか、もしそうであれば、日々どのように実践し、活用しているのか、もし実践できていないのであれば、なぜそれが活用されないのかを明らかにすることで、授業改善への取り組みを具体化していく手がかりを得ることができると考えた。

そこで、本研究では、小学校を対象にして、次の4点を明らかにすることを目的とした。

まず、第1に、教師の授業改善への取り組み状況を明らかにすることである。第2に、実際の授業で体育授業の改善に利用されている方法を明らかにすることである。第3に、改善に利用されている方法の長所と短所を明らかにすることである。第4に、授業改善上、教師が必要であると考えている情報について明らかにすることである。

これら4点をもとに、体育授業改善の取り組みの現状とその方法の実態を明らかにすることによって、今後、体育授業改善をするための授業分析法を提案する上での基礎資料としていきたい。

* 埼玉大学教育学部保健体育講座

II 研究の方法

S県小学校の体育授業を担当している教員を対象として、質問紙調査を行い、その結果を考察することとした。なお、参考として全国の体育授業を学校課題として研究している小・中・高等学校に同様の調査を行い、比較検討を行うこととした。

S県小学校68校を無作為に抽出し、調査紙を郵送し、そのうち回収率41%で返信があった28校の271名が回答した質問紙を対象として分析を行った。

なお、調査は、平成17年8月4日から平成17年9月10日に実施した。

調査する上で、まず、質問紙を作成するにあたり、小学校3校の50名に対して予備調査を行った。そして、その回答をコーディングし、項目を整理して質問紙を作成した。その後、S県全域を対象とし、一箇所に集中しないよう、6つの行政区からそれぞれ均等に無作為に学校を抽出し、質問紙を郵送した。同様に、全国の体育授業を研究している小・中・高等学校にも郵送した。

回答があったものについて、選択回答の質問については、割合で比較し、可能なものは「直接確立計算」あるいは「カイ自乗検定」を行うこととした。また、自由記述については、同様の内容についての記述に分類し、カテゴリーを作成して比較し、内容分析をすることとした。

調査項目は資料1の通りである。

項目1と6が授業改善の取組みの実施率を明らかにする設問である。また、項目2と3と4と5が授業改善の取組みの方法を明らかにする設問である。さらに、項目7と5が授業改善の有用性に対する認識を明らかにする設問である。そして、項目8と9と3が、授業改善上の必要な情報を明らかにする設問である。

III 調査の結果

1 体育授業改善の取組みの実施率

体育における授業改善の取組みの実施率は、1%水準で有意に高いことが明らかとなった。行っていないという理由については、時間が無い、体育では行事に従ってやるのが決められている、手一杯である、必要がないという回答が多かった。また、取組みの頻度については、学期に1回程度、年に1回程度というものが多く、毎時間や単元のはじめと終わりという比較的短い期間での日々の授業改善は、他の頻度に比べ、有意に低いことが明らかになった。しかしながら、少数意見ではあるが、授業実践をしながら改善を同時に行っているとか、その都度その都度、改善を心がけているというように、指導のプロセスの中に授業改善を位置づけて考えている回答も見られた。

行っている	162
行っていない	109

(単位は人)

n=271

両側検定 : p=0.0015 ** (p<.01)

片側検定 : p=0.0007 ** (p<.01)

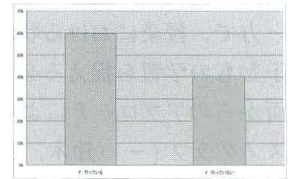


図1 授業改善の実施の有無

n=153
「カイ自乗検定の結果」
(上段実測値、下段期待値)

52	33	27	15	8
27.000	27.000	27.000	27.000	27.000

$\chi^2(4) = 43.188$, p<.01

==ライアン名義水準を用いた多重比較==
(有意水準 alpha = 0.05 とします)

セル比較	臨界比	検定	名義水準
1 = 2	1.95	ns	p>.05
1 > 3	2.70	*	p=0.0068
1 > 4	4.40	*	p<0.0002
1 > 5	5.55	*	p<0.0002
2 > 3	0.64	ns	p>.05
2 > 4	2.45	ns	p=0.0138
2 > 5	3.75	*	p<0.0002
3 = 4	1.70	ns	p>.05
3 > 5	3.04	*	p=0.0022
4 = 5	1.25	ns	p>.05

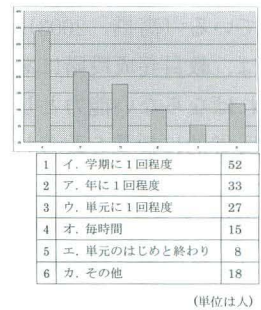


図2 授業改善実施の頻度

2 授業改善の取組みの方法

方法については、「他の先生の授業を観察・評価する」といった回答が有意に多く、他の項目は有意差がなかった。しかしながら、具体的な評価の観点と方法を問う4の設問では、「他の先生の授業を観察・評価する」、「他の先生に授業を観察・評価してもらう」といった回答をした教師の多くが無回答であった。一方、「子どもに授業を評価してもらう」ものとして子ども達が学習カード等に記入した情報を改善に利用するものが具体的に多く回答されていた。次いで、教師が名簿等を利用して子どもを評価し、その情報を生かすという回答が多くあった。その後、形成的授業評価を実施することによって授業の善し悪しを判断したり、ビデオや第三者による授業観察を通して客観的に授業分析を行ったりという方法が続いた。これらの具体的に回答された授業改善の方法の長所としては、客観的に授業を振り返ることができることや具体的なフィードバック情報を得ることができるなどがあげられているが、一方で、時間がかかることや活動時間、指導時間の減少が短所としてあげられている。

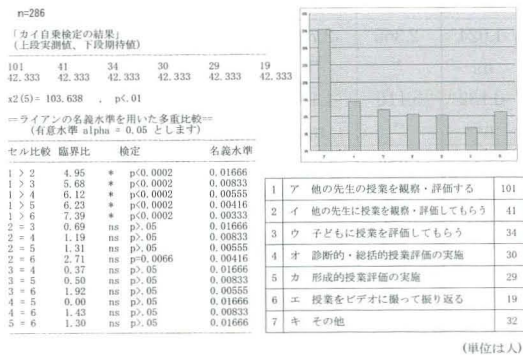


図3 授業改善の方法

3 授業改善の有用性

授業改善の取組みが日々の実践に生かされているかという問いに対して、「思わない」という回答は1人もいなかった。85%をこえて「思う」

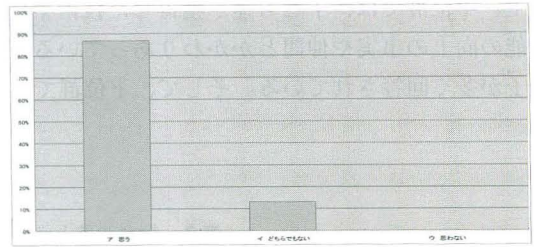


図4 授業改善の有用性に対する認識

と回答しており、授業改善の有用性に対して強く認識していることが明らかとなった。また、その長所として、学びの足跡を残せる、評定に生かせることなどをあげている。一方、短所として時間と手間がかかる、客観的に評価ができない、正しく改善の方向を見出しているかが不明であることなどをあげている。

4 授業改善上の必要な情報

教師が授業改善をする上で必要な情報を順位づけして選択回答した設問では、子どもたちの学習による変化の様子が第1位で有意に多いことがわかる。また、1位～3位の上位群で見れば、子ども達が意欲的に取り組んでいた場面が有意に多いことがわかる。さらに、選択総数でもこの項目がもっと多く回答されている。その

表1 授業改善上必要な情報の項目

ア	子どもたちの学習による変化の様子。	101
イ	教師の指導が子どもの学習に与えた影響。	41
ウ	子どもたちが意欲的に取り組んでいた場面。	34
エ	子どもたちが消極的になってしまった場面。	30
オ	子どもたちが獲得した技術や技能の向上の事実。	19
カ	子どもたちが楽しんでいる様子。	32
キ	子どもたちが授業を振り返って感じていること。	
ク	子どもたちが仲間とかかわりあっている様子。	
ケ	子どもたちが教材や場とかかわっている様子。	
コ	授業の勢いや雰囲気。	
サ	子どもたちの運動量。	
シ	その他	
有効回答者数：201名（①未回答者：0名，②未回答者：6名，③未回答者：9名，④未回答者：34名，⑤未回答者：67名）		

上、中位群では、子ども達が獲得した技術や技能の向上の事実や仲間とかかわりあっている様子が多く回答されている。そして、下位群では、

子ども達の運動量、子ども達が振り返って感じていること、授業の勢いや雰囲気が有意に多く回答されている。

表2 授業改善上必要な情報のカイ自乗検定の結果

(上段実測値、下段期待値)

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	シ
①	72 31.201	9 13.34	56 34.141	12 11.305	15 31.201	10 17.409	7 10.853	0 16.505	5 9.27	4 9.722	11 15.827	0 0.226
②	20 30.27	29 12.942	52 33.121	13 10.967	32 30.27	21 16.89	6 10.529	8 16.012	2 8.993	4 9.432	8 15.354	0 0.219
③	14 29.804	6 12.742	27 32.612	15 10.799	44 29.804	19 16.63	10 10.367	33 15.766	6 8.855	9 9.287	9 15.118	0 0.215
④	19 25.924	6 11.083	11 28.366	4 9.393	26 25.924	18 14.465	13 9.017	20 13.713	19 7.702	14 8.078	17 13.15	0 0.187
⑤	13 20.801	9 8.893	5 22.76	6 7.537	21 20.801	9 11.606	12 7.235	12 11.003	9 6.18	12 6.481	25 10.551	1 0.15

$\chi^2(44) = 300.419$, $p < .01$

Phi=0.290

表3 授業改善上必要な情報の残差分析の結果

(上段調整された残差、下段検定結果)

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	シ
①	9.033 **	-1.398 ns	4.667 **	0.241 ns	-3.587 **	-2.112 *	-1.367 ns	-4.82 **	-1.632 ns	-2.138 *	-1.437 ns	-0.54 Ns
②	-2.299 *	5.229 **	4.075 **	0.715 ns	0.387 ns	1.184 ns	-1.624 ns	-2.365 *	-2.702 **	-2.052 *	-2.213 *	-0.53 Ns
③	-3.557 **	-2.208 *	-1.218 ns	1.486 ns	3.195 **	0.686 ns	-0.132 ns	5.116 **	-1.109 ns	-0.108 ns	-1.851 +	-0.525 Ns
④	-1.642 ns	-1.753 +	-3.971 **	-2.01 *	0.018 ns	1.079 ns	1.513 ns	1.966 *	4.625 **	2.37 *	1.228 ns	-0.481 Ns
⑤	-2.019 *	0.04 ns	-4.434 **	-0.625 ns	0.051 ns	-0.868 ns	1.976 *	0.34 ns	1.26 ns	2.411 *	5.029 **	2.375 *

+ $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

表4 授業改善上必要な情報の実測値と残差分析の結果

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	シ
①	72▲	9	56▲	12	15▽	10▽	7	0▽	5	4▽	11	0
②	20▽	29▲	52▲	13	32	21	6	8▽	2▽	4▽	8▽	0
③	14▽	6▽	27	15	44▲	19	10	33▲	6	9	9	0
④	19	6	11▽	4▽	26	18	13	20▲	19▲	14▲	17	0
⑤	13▽	9	5▽	6	21	9	12▲	12	9	12▲	25▲	1▲

(▲有意に多い、▽有意に少ない、 $p < .05$)

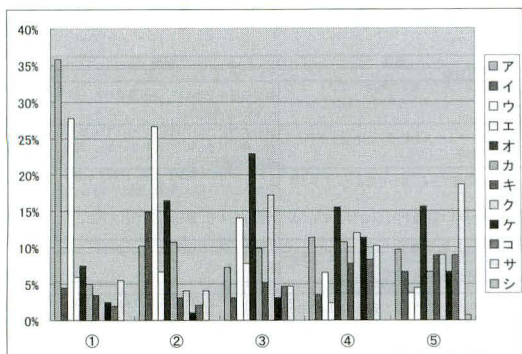


図5 授業改善に必要な方法の順位毎の割合

IV 調査の考察

1 体育授業改善の取組みの実施率

授業改善の取組みの実施率は非常に高いことが明らかとなった。しかし、研究校に比べ、S県小学校では、行っていない率が高いこともわかる。その理由を見ると、時間がない、授業改善の取組みまで手がまわらないといった回答が中心である。すなわち、授業改善の取組みは、授業の実施とは別の取組みという認識をもっていることが明らかになったといえる。また、実施の頻度も、S県小学校では年1回というものが多く、その多くは、授業研究会への参加、授業研究会の実施というかたちで行われている。つまり、授業改善の取組みは、授業実践においては特別な位置づけをもち、余裕のなさから、日々の実践の中には埋め込みにくいものであることが明らかとなった。

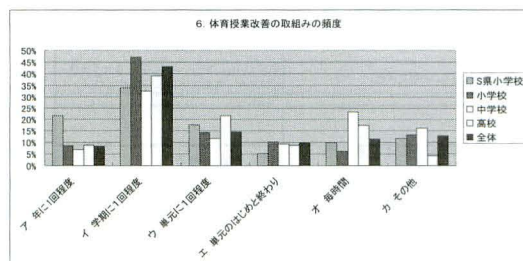


図6 体育授業改善の取組みの頻度の研究校との比較

2 授業改善の取組みの方法

実施率でも明らかになったように、改善への取組みの多くが、授業研究会への参加である。この方法の活用における長所の回答から、これは他の教師の授業実践から指導上の工夫やヒントを得ることが授業改善上の目的となっていると考えられる。したがって、その評価の観点を見ると、運動量や指導形態、場の工夫などから善し悪しを判断し、善いと判断したものを一般化し、自分の授業に適用していくといった方法といえる。短所を記述している教師が少なく、この方法は、教師の年間の取組みの中で通常行われているものであり、負担も少なく、有効な方法であると考えられていると思われる。すなわち、よい授業を見て学ぶ授業改善の方法といえる。Graham (2001, p.200) もまた、このように授業を観察することは、本を読んだり、研究会やワークショップに参加したりする以上に価値が高いと述べ、新しいアイデアに刺激され、授業改善につながるとしている。しかしながら、この改善方法は、授業研究会に参加して得たアイデアが脱文脈化しやすく、その教師自身が指導する子どもの実態から授業づくりをするというよりは、教材優先の授業づくりになってしまう恐れもあることが予想される。この場合、佐藤 (1996) が述べるように、効率的な享受システムの開発や有効な教材プログラムの開発を追求する上では、有効といえるが、教師に求められる実践的な認識のあり方を獲得しようとする教師のリフレクション能力への還元は難しいといえる。

3 授業改善の有用性

授業改善に対して取り組むことが、日々の授業づくりに生かされていると多くの教員が認識をしている。これは、S県小学校だけでなく、研究校にとっても同様である。また、長所として学びの足跡が残せる、評定に生かせるといったことをあげていることから考えると、授業改善の取組みを学習評価の一環として利用し、指

表5 授業改善の方法の利用の理由と長所・短所

人別	評価の観点	4 活用している理由 A 名簿を利用して教師が把握した情報を利用	長所	短所
14	子どもの伸びを記録していく。(技能、関心・意欲・態度)	進捗状況把握のため、他に準備する時間がないため。	資料として残る。適切な指示ができる。すでにできているものである。他に転記しやすい。	指導に集中できない。評価標準があいまいになることがある。
		自分の技の伸びを知ると、励みになる。	記録で一人一人の様子、心の調子がわかることもある。	自分の体について知ることとしているが、記録の伸びばかりにとらわれないよう人間関係にも配慮したい。
		体育の嫌いな子をつくりたくないから。	細かく評価できる。伸びを認めることができる。	メモするの時間がかかる。評価するのに気が入っていない。助言・補助ができなくなる。
		一人一人の伸びがわかるように。	細かい所まで評価でき、次の授業に生かせる。	時間がかかる。評価にとらわれすぎてしまう。
7	楽しんでるか、満足しているか。	一人一人の伸びがわかるように。	すでに済み、準備がない。	手続的になってしまう。
8	仲間と協力して行っているか。他の児童とのかわり	子どもたちが得意を得意ようにするため。知識不足のためもっといい方法を知らないため。	すぐに済み、準備がない。	手続的になってしまう。
9	技能向上、関心・意欲・態度の様子。	知識不足のためもっといい方法を知らないため。	すぐに済み、準備がない。	評価しきれない。
4	補助運動の活用・指導詳細を明らかにする。	よりよい評価をするため。	子ども一人一人しっかりと評価できる。	時間がかかる。
3	指示の話し方・受け方、並び方、声の出し方、準備運動への取組み、学習活動への取組みなど、児童の行動を観察する。	評価に生かす。小さい伸びを知る。	次の評価に役立つ。後の反省、次時に生かせる。全体的な流れがつかみやすい。	記入中の児童の行動がつかめない。数多くできない。その場でのアドバイスがやりにくい。
		個別指導に役立つため。	クラスの児童全員におちかなく指導が行きわたる。児童がはりきって取り組む。	記録をしていると必要な時にさっさと手が出せないことがある。
2	技能を高めるように自分なりに工夫しているか。	意欲を持って活動することが大切だと考えているから。	児童が生き生きと活動していることがわかり、さらに興味を持つような改善を行うことができる。	授業中、助言をするより評価をすることが主になってしまうことがある。技能の差が大きい時に困る。
		様々な場面・方法で観察評価し、指導と評価に役立てる。		
B 学習カード等を利用して子どもが把握した情報を利用				
32	自分にあつためあてはもてているか。めあてが達成できたか。正しい観点から正しい目標の適切さを明らかにする。授業改善 実践にあつためあてを立てる。記録用紙等作成。めあてにそって評価	他に準備する時間がないため。一人ひとりを把握しやすいため。児童の感想を大切にしたいから。子どもにとっても簡単な評価だから。通知票の評定を出す時の参考にする。	めあてにそった評価ができる。目標を立てやすい。	いいものが準備できないときがある。低学年では書のに時間がかかる。毎時間行うことができない。子どもの視点が様々で整理しにくい。
		その子自身の頑張りを認めてあげたい。個人の力に応じた指導をするため。	めあてが明確になる。助言がしやすい。児童のやる気につながる。	技能面ではレベルの問題もあるので、いびい本人が頑張ったとはいえず評価に表れない場合が多い。
		継続的に評価するため。	準備にあつた準備ができる。	
		子どもたちがどれだけ目標を達成できたかを知るため。	次の学習につながる。観念をほすと教師からでも児童からでも、できているかいないかが明確になる。	
1	上達・向上の度合いを実感させるため。技能・体力向上のため。実態をしかり把握し、児童が寄り組みやすいめあてを設定し、場を準備し、授業を進めていくと児童が前向きに取り組めるから。達成感も味わわせる。	児童一人一人が課題を見つけ、それに向かい合っている。	児童一人一人が課題を見つけ、それに向かい合っている。	児童の評価は曖昧な場合もある。
		技能・体力向上のため。	次回の指導法やめあてに活用、一人一人を認めることができる。	時間がかかる。
		実態をしかり把握し、児童が寄り組みやすいめあてを設定し、場を準備し、授業を進めていくと児童が前向きに取り組めるから。達成感も味わわせる。	子どもが達成の喜びを味わうことができる。学習カードで児童が自身のめあてを持ちやすい。	場の設定が困難になる場合が多い(用具・時間の不足)。週1時間の体育の時は、継続性がなくなる。
		達成感も味わわせる。	継続的に授業に取り組む。	時間がかかるが、長期継続評価に不向き。
13	子どもの意欲・関心・態度。	子どもたちの評価のため。	すぐに子どもにフィードバックできる。資料として残る。	活動の時間が減る。
		授業を見ているだけではわからない児童の意欲や動きあがりについて、数値で把握することができるから。	1時間ごとの評価ができる。短時間で実施できる。評価を次の授業に生かせる。	データの処理に時間がかかる。
1	グループ集団としての伸び。(単元別評価カードを使用。)	授業をよりよいものにするため。	子どもの気持ちわかる。自分の反省にもなる。	時間と手間がかかる。評価の視点が自分本位でバラバラ。
		一人一人の満足度を高め、より楽しい授業を組み立てるため。	着実に子どもをわかる。	なかなか、分析、方法変更など時間確保が難しい。
C 形成的授業評価による分析				
6	授業評価得点	技能を身につけさせ、伸ばすため。	教師が指導目標や内容をしっかりと把握できる。	評価に時間が取られすぎて、直接的指導が不足。
		次回に向けてのプランニングのため。形成的評価で個に対応するため。	個に対応できる。変化をもつて子どもに新しい刺激を与えられる。	形成的授業評価は体育の授業外で行うので毎回は大変。
		速すべき内容を達成できたか評価を行うため。また、その結果を次に生かすため。	授業に対して振り返る事ができる。密着的な評価ができ、授業改善ができる。	毎時間行うのは難しい。
		他に有効な方法を知らない。次時の指導・支援に生かせる。		集計が忙しい。
D データによる授業分析				
2	1時間の授業の流れ。	身近なところからできるので取り組みやすい。		
1	肯定的な助言の数と内容。	営業がけて児童が大きく喜ぶため。	子どもの様子を冷静に見たり、言葉がけの検討ができる。	手間がかかる。
		技能の伸びを授業後に詳しく観察するため。	一人ひとりの課題が把握しやすい。アドバイスも特定しやすい。	全領域までは手がまわらない。
1	子どもの技能の伸び。			
E 子どもへのインタビュー				
6	子どもたちに感想を聞く。	子どもの思いを知るため。	子どもの実態を把握できる。想定外の効果も発見できる。	効果が上がったかわかりにくい。子どもの気持ちに左右される。
3	安全にできたか、協力してできたか、めあてにそってできたか授業の終わりに子どもに聞く。	習慣になっている。	だいたい授業の反省ができる。	活動の時間が減る。
F 第三者評価				
8	声のかけ方や指導方法。	子どもたちのリアルな反応が見られたり、臨場応変な対応を見ることが出来るから。	生きた授業、リアルな指導がみられる。客観的に分析できる。	それぞれ仕事があり忙しいことが多かったり、指導計画もあるので、見せていただいた授業、見ていただきたい授業のやりくりが難しい。一人ではできない。
1	通知票の準備・通知票指示子ども同士のかわり			
1	教師と子どものかかわり	客観的に観察するため。	客観的に見ることができる。	子どもたちにアンケートをとりと、それを数値化するが、毎単元で行うことができない。
G 研究授業の利用				
2	研究授業を通して、運動量が確保されているかどうか、授業改善の視点を導くようにする。	自分の授業に反映させるため。体力向上のためには、児童の活動量を確保する必要があるから。		
7	研究授業を実践する中で、子どもの運動量、指導形態や場の工夫はよくなったか。	授業をよくしていくため。	教師の指導方がアップする。授業資料・リハートリーが揃える。	時間と手間がかかる。
7	研究授業を見たりする中で場の設定や教具の工夫を学ぶ。	自分の授業に反映させるため。客観的に観察するため。	様々なアイデアを手に入れることができる。わかりやすく分析できる。	
1	学年で合同体育を実施しながら他の教師の授業実践のよい点から学ぶ。	標準の指導を徹底するため。いろいろな児童が入学するようになり、1人の教員では指導が困難であるため。		
H まとめ				
1	個別の目標設定→手段・練習方法→評価		実態に即してできる。個別を生かす。指示・発問等の有効性確認。	客観性に問題がある。指導要領との適合性。

表6 必要な情報の回答理由

14	ア	子どもの変化で授業の善し悪しを判断することができるから。
5	ア	子どもたちの様子、反応が一番直接的でわかりやすいから。
1	ア	児童の興味・関心に微妙な変化を感じるから。
1		子どもの実態にに応じているかを考えて授業を確立したいから。
1	イ	児童が技術を獲得するために必要な教師の力を知りたいから。
2	イ	教師の力量が子どもの力を引き出すのに関わっていると思うから。
11	ウ	意欲的に楽しく取り組まないと技能も向上しないだろうし、運動量も増えないと思うから。
1	ウ	意欲的に楽しんでいることが生涯体育へとつながると思うから。
19	ウ	子どもたちが意欲的に取り組める授業が理想だから。
1	ウ	運動の嫌いな子や嫌いな種目でも取り組む気持ちに持っていかなければならないと思うから。
1	ウ	関心が持てる内容を常に意識させたいと思うから。
1	エ	消極的な態度が見られると、指示が悪かったかと反省の材料になるから。
1	エ	進んで授業に参加しないと体力も技能も心も育たないから。
14	オ	技術を獲得し、技能を高めることが子どもにとって喜びであり、楽しさであるから。
1	カ	低学年担任だから。
1	カ	いろいろな運動に楽しく取り組ませたいから。
13	カ	楽しく授業に参加することが大切だと思うから。
1	キ	授業から子どもたちが何を感じ、何を学んでいるのかを知ることは大切であるから。
4	ク	友達とのかかわりの中で技能を身につけようとする雰囲気を大切にしたいから。
1	ク	仲間とかかわりあうのは、体育だけでなく、きっかけにもなると思うから。
1	ケ	場の設定と児童の思いを丁寧に重ね合わせると、意欲や技能の低い児童にも楽しく長く続けられる体育というものが見つけられると感じたから。
2	ケ	場の設定の仕方です子どもたちの活動に広がりを見せることが多いから。
1	サ	運動量が適切だと子どもたちの満足感が伝わってくるから。
13	サ	たった45分の中で、運動量を確保することは大切だと思うから。
1	サ	生活の中での運動量が不足しているから。
1	サ	日常における児童の運動量には個人差が見られるから。
1	サ	教えたいことや身につけさせたい技術の説明が多くなり、運動量が少なくなりがちであるから。
1	サ	実態に応じて個に合った指導が追求できる。
1	オ・カ・ケ	できる喜び、伸びる喜び、集う喜び、認められる喜び等を味わわせることが大切だと思うから。
1	ウ・オ	技術や技能が向上すると、運動がより積極的になるので意欲が伝わってくるから。
1	ク・ケ	場の設定、自分と友だちの役割の中でいろいろな動きに挑戦していき、運動を好きになるきっかけができるといいと考えているから。
1		形成的授業評価がクラスの様子を表すから。
1		子どもたちの体（動き）と表情は教師にとっての一番の情報であるから。
1		子どもの実態と授業技術を知りたいと思うから。
1		子どもたちが楽しんで取り組みつつ、技術・技能の向上を図る指導ができればベストと考えるから。
1		改善よりももっと体育の授業内容の研究を研究授業をするたびに考えたりしている。
1		高レベルの子への指導方法がよくわからない。（自分の技能がついていけない。）
1		新しい内容のものを指導するのにまわりの仲間聞きながらやるのに精一杯。
1		授業研究会や新しい体育授業の伝達講習会等へ参加する機会がない。
1		教材研究の取り組み方がよくわからない。
5		授業改善に取り組む時間がない。
1		学校研究課題が体育科であった時はいろいろ取り組んだが、現在は特別に行っていない。
1		他の先生に相談することはあっても、なかなか研究授業等がないとお互いに評価・観察等、時間的にも難しい。

(数字は人数)

導と評価を一体化させる試みの一つとして捉えている教員が多いと解釈することもできる。しかしながら、一方で、授業改善の取組みに時間がかかり、手間がかかる取組みであるが故に、実践化されにくいことも明らかとなった。すなわち、授業改善の方法を行っていると回答している教員はS県小学校でも有意に多かったわけであるが、その改善方法としてあげているものの多くが、授業研究会への参加であったように、授業改善の試みは有用であると考えながらも日々の授業実践の中では行いたくても行えないような現状が実際には課題となっているといえよう。

4 授業改善上の必要な情報

教師が授業改善上必要であると考えているのは、意欲や技能面も含めた子どもの学習上の変化や意欲的な活動場面の読み取りである(表6)。第1位の回答として、「子ども達の学習による変化の様子」があげられているにもかかわらず、上位群、そして、全体で「子ども達が意欲的に取り組んでいた場面」が有意に多く回答されていることから、学習している状況と文脈の中で「子どもの学習による変化」を読み取ることが授業改善につながると考えている教師の考えが読み取れる。

また、中位群で、「子ども達が獲得した技術や技能向上の事実」、「仲間とかかわりあっている様子」という項目が有意に多いことから、子どもの学びの変化を読み取る具体的な指針として「技能向上」と「社会性」を取り上げていると考えられる。

さらに、下位群で、「授業の勢いや雰囲気」、「子ども達の運動量」などといった、形成的授業評価に代表される量的測定によって得られる情報が回答されている。すなわち、「技能向上」、「社会性」や「授業の勢い」、「運動量」など量的測定で読み取ってきたものを授業の善し悪しを判断する周辺的な要因として手がかりとしながら、状況関連的に子どもの学習による変化の

事実を読み取ろうとしている教師の姿勢がうかがえる。しかしながら、一方で、実際に行っている授業改善の方法を見ると、達成の度合いを量的に判断していくものが多くある。すなわち、中位群、下位群で抽出された項目を中心に授業改善のための情報として得ようと取り組んでいることがわかる。

このようなことから、教師は状況と文脈の中で、授業改善に必要な情報として質的な情報を求めているながらも、実際には量的情報に依存して授業改善を進めていることが明らかとなった。

V 結論

以上の考察から、授業改善の取組みは教師にとって授業実践とは別の特別なものであるという認識をもたれていることが明らかとなった。また、授業改善の有用性は認めつつも、手間がかかるということから取組みに対して消極的になっている側面があることが明らかになった。さらに、質的情報が必要と考えながらも、客観的なデータによる改善に終始してしまう傾向があることが明らかになった。

そこで、今後、手軽な質的授業改善の方法の開発を行う必要があると考えられる。その際、今回の調査で得た知見から、次のようなことに配慮する必要があるといえる。

まず、授業改善を指導と評価の一体化の中に埋め込み、授業のプロセスの渦中における教師のリフレクシオンの思考としてとらえる必要がある。すなわち、教師側のアカウントビリティとして授業改善への取組みを位置づけ、子どもの学習保障をしていく必要がある。

以上のことから、今後の体育教員養成においては、その専門性の育成の一つとして反省的実践家としての力量を位置づける必要があると考えられる。さらに、日々の授業改善における位相と研究授業などに代表される特定の授業改善の位相を融合させ、相互連関をもたせる中で、効果を高めていく必要があると考える。そして、そ

のような授業改善に取り組んでいく中で体育教師としてのアカウンタビリティも果たすことができるのではないかと考える。今後は、これらの視点を大切にされた授業分析に関する研究に取り組んでいきたい。

付記 本研究は、平成17年度科学研究費補助金「若手研究 (B)」の助成を受けて行ったものである。

参考文献

- 1) Graham (2001) Teaching children physical education:becoming a master teacher (2nd edition).Human Kinetics.
- 2) Rink (2006) TEACHING PHYSICAL EDUCATION FOR LEARNING (5th edition) . McGraw-Hill. pp.333-377
- 3) Ryan (2005) The reflective physical educator. Detselig Enterprises Ltd.
- 4) SUZUKI Naoki (2005) Study into the process of how students generate meanings of physical behaviours. Invitation to the 6th German-Japanese Symposium of Sport Scientists. (発表抄録)
- 5) 長谷川悦示・高橋健夫ほか (1995) 小学校体育授業の形成的評価票及び診断基準作成の試み. スポーツ教育学研究.第14巻第2号. pp.91-101.
- 6) 高橋健夫・長谷川悦示ほか (1994) 体育授業の「形成的評価法」作成の試み.体育学研究.第39巻第1号. pp.29-37.
- 7) 高橋健夫 (2003) 序章 体育授業を観察評価する. 高橋健夫編:体育授業を観察評価する.明和出版. pp.1-2.
- 8) 佐藤学 (1996) 授業研究の課題と様式.稲垣忠彦・佐藤学:授業研究入門. 岩波書店. pp.118-123.
- 9) 鈴木直樹 (2006) 体育授業における「学習評価としてのコミュニケーション」の機能に関する研究—小学校体育授業の質的な授業研究を通して— 埼玉大学教育学部紀要 (教育科学).第55巻第1号.pp.7-21.

(2006年9月29日提出)

(2006年10月13日受理)

資料 1

体育授業改善の方法に関する調査

市町村名 () 教員歴 (年目) 性別 ()

○ 体育授業を担当している先生が個人の意見としてご回答下さい。自由記述と書いてあるものは、空欄に記述下さい。また、選択式と書いてあるものについては、選択肢から選んで○をつけるか、選択記述して下さい。

1. 体育の授業改善をするための取り組みを行っていますか。

ア) 行っている イ) 行っていない(理由:)

*ア)と回答した方は2にお進み下さい。イ)と回答した方は8にお進み下さい。

2. 体育の授業を改善するためにどのような取り組みを行っていますか。(複数回答・選択式)

ア) 他の先生の授業を観察・評価する イ) 他の先生に授業を観察・評価してもらう
ウ) 子どもに授業を評価してもらう エ) 授業をビデオにとって振り返る
オ) 診断的・総括的授業評価の実施 カ) 形成的授業評価の実施
キ) その他 ()

3. 2. で回答した体育授業を改善するために活用している授業観察及び授業評価法について具体的に教えてください。(複数回答・自由記述)

(1) どのような観点で観察や評価を行っていますか?

(2) 観察や評価を行う際の手順について教えてください。また、その際に利用している記録用紙等がありましたらその内容を教えてください(記録用紙を添付いただけると幸いです)。

4. 3で回答した授業観察及び授業評価法を活用している理由を教えてください。(複数回答・自由記述)

(裏面につづきます)

資料 1

5. 3で回答した授業観察及び授業評価法を活用してみて感じている長所と短所を教えてください。
(自由記述)

<長所>

<短所>

6. 体育授業改善の取り組みはどれくらいの頻度で行いますか？(選択式)

- | | |
|------------|---------------|
| ア) 年に1回程度 | イ) 学期に1回程度 |
| ウ) 単元に1回程度 | エ) 単元のはじめと終わり |
| オ) 毎時間 | カ) その他 |

7. 授業改善の取り組みは日々の授業実践に生かされていると思いますか？(選択式)

- ア) 思う イ) どちらでもない ウ) 思わない

8. 体育授業改善を行う上で、手がかかりとなる情報は何ですか？下欄に重要だと思う順に記号を書いてください。(最大5つまで・選択式)

- ア) 子どもたちの学習による変化の様子。
- イ) 教師の指導が子どもの学習に与えた影響。
- ウ) 子どもたちが意欲的に取り組んでいた場面。
- エ) 子どもたちが消極的になってしまった場面。
- オ) 子どもたちが獲得した技術や技能の向上の事実。
- カ) 子どもたちが楽しんでいる様子。
- キ) 子どもたちが授業を振り返って感じていること。
- ク) 子どもたちが仲間とかかわりあっている様子。
- ケ) 子どもたちが教材や場とかかわっている様子。
- コ) 授業の勢いや雰囲気。
- サ) 子どもたちの運動量。
- シ) その他 ()
- ス) その他 ()
- セ) その他 ()

① () ② () ③ () ④ () ⑤ ()

9. 8で回答した理由を簡単にお書き下さい。(自由記述)

ご協力ありがとうございました。集計結果をメールにてお送りしますのでご希望の方は、下記にメールアドレスをお書き下さい。

e-mail: _____

A report about the present conditions of teacher's effort and
the actual conditions of the method toward improving lessons
in physical education

～ Aiming at a better physical education lessons qualitatively ～

Naoki SUZUKI

Keywords : Improving lessons, Qualitative research, Reflection

In this paper, the present of teacher's effort and the actual of the method in improving physical education lessons are revealed. It is fundamental data so that a method of analyzing lessons is proposed in improving physical education lessons. Then, the purpose of this paper is following.

- 1 The action situation that teachers improve lessons.
- 2 The method that teachers use to improve physical education lessons actually.
- 3 Good and bad points of a method used for improvement.
- 4 The information that teachers think to be necessary in improving lessons.

The investigation intended for teachers in charge of physical education lessons in S-prefecture elementary schools was carried out. The result was considered after investigations using question papers were carried out. 68 elementary schools was chosen at random in S- prefecture. Question papers were mailed there. It was 271 people who had a reply at recovery 41% soon that assumed an analysis object.

As a result, as for the action of improving lessons, it became clear for teachers that it was had recognition to be special that was different from doing lessons. In addition, as for the utility of improving lessons, it became clear that there was the side that became negative for an action that it took trouble while recognizing it. Furthermore, it became clear to tend to do improvement by objective data all the time while thinking that qualitative information was necessary.